童話

読んだり
書いたり

楽しもう

漆原 智良

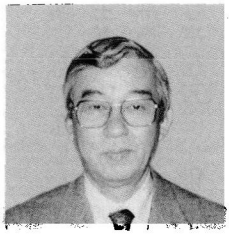
KTC中央出版

童話 読んだり書いたり 楽しもう

漆原 智良

日本財団支援
笹川良一記念文庫
財団法人日本科学協会

KTC中央出版



著者プロフィ

漆原智良（うるしばら・ともよし）

1934年東京に生まれる。児童文学作家・教育評論家。東京都公立中学校教諭を中途依願退職し、立教大学、実践女子短大、秋草学園短大講師として「児童文学論」「幼児教育論」を担当。『作文の書き方おしえてよ』『感性のたねをまきながら』（共にＫＴＣ中央出版）、『小さな文学の旅』（金の星社）、『優しいことばを心のひだに』（国土社）などの教育書のほかに、長編読み物『野口英世』『すきになってもいいでしょう』（共にぎょうせい）、『ふるさとはヤギの島に』（あかね書房）、『学校は小鳥のレストラン』（アリス館）など作品多数。現在、日本児童文芸家協会理事。教育講演会、児童文学講座などに招かれ全国各地奔走中。

初　版　1998年４月23日
第2刷　2002年10月14日
著　者　漆原智良
発行人　前田哲次
発行所　KTC中央出版
〒460－0008　名古屋市中区栄1－22－16
TEL 052 (203) 0555
〒163－0230　東京都新宿区西新宿2－6－1－30
TEL 0120－160377（注文専用フリーダイヤル）
振替　00850-6-33318
印刷所　竹田印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社までお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-87758-090-5 C0095
© Tomoyoshi Urushibara 1998 Printed in Japan

童話 読んだり書いたり 楽しもう

漆原 智良

童話 読んだり書いたり 楽しもう

目次

あなたの夢をペンにのせて／4

第1章 童話を読む ～書くために～

1. なつかしい童話を読みかえす
◆ひろすけ童話／16
◆未明童話／38
◆南吉童話／45

2. 現代の童話を読む
◆立松和平の童話／52
◆新人童話作家たち／66
◆戦争体験を題材とした童話／77

第2章 童話を書く

1. ペンを握るまで
◆作品が生まれるまで／88
◆「作品完成まで」の基本／103
◆童話のタネを見つける目／115

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2. 原稿用紙にむかう
◆書き出しを工夫する／130
◆さまざまな表現のしかた／139
◆くわしく「描写」「説明」する／148

第3章 実作研究

1. 初心者の作品から／162
2. プロ作家の目／195

参考資料

◆原稿用紙の使いかた／216
◆くぎり記号・符号の使いかた／222
◆子どもの本関係社団法人／227
◆子どもの本関係出版社／228

あとがき／232

装丁・本文イラスト　篠崎三朗
装丁・本文デザイン　ひろせ森央
編集協力　室　裕子
　　西平　学二

あなたの夢をペンにのせて

◓心豊かな人間性

「となりの国へ、重油をはこんでいた船が、大波をうけて、二つにわれてしまった。船にはタヌキ船員さんたちが大勢のっていた。

どうぶつ村から、すぐにワシの一団がとびたち、タヌキ船員さんたちをすくいだした。

ちんぼつした船からは重油が流れだした。海がよごれはじめた。すると、ゾウさんたちが、協力して立ちあがり、ながいはなで重油をすいあげ、またたくまに海をきれいにしてしまった。」

みなさんは、ある日、ニュースをみて、たとえばこんな童話を書いてみたいなあ、と思ったことはありませんでしたか?

さりげなく握った自分のペン先から『日ごろ思っていること、感じていること』が、ひたひたと、原稿用紙の上に、ことばとして流れ出していったら、どんなにか、楽しいことではないでしょうか。

最近、生涯学習の一環として、各市町村が主催する、公民館や、カルチャーセンターなどでの集いに、「童話を書いてみませんか?」という講座が増えはじめてきました。

私もときおり、講師として招かれ、「創作手法」「童話のペンを握るまで」など、童話を生み出すまでの基本的なことがらについて、話をさせていただいております。

受講生は、若い学生さんから、ご年輩の方々までさまざまです。なかでも多いのは若いお母さん方で、子育てと並行しながら、「子どものために、童話をどう読むか研究し、自分自身も、ものを書いてみよう」と、意欲に燃えて参加しているのです。

なぜ、こんなにも童話を書きたいという人たちが増えてきたのでしょうか。

講義を終えたあと、喫茶室などで受講生たちと、歓談していると、

「わが子のために、自分だけの一冊の童話をつくってみたい」

「ものを書いていると、頭がボケないと思いまして……」

「この世の中のいやなことを、童話という形で表現してみたい」

「幼稚園児に、自分の書いた童話を、よみきかせてあげたい」

「孫のために、自分の体験を童話の形で伝えていきたい」

「童話作家になるのが夢なので……」

など、ホンネがとび出してくるのです。

さらに、童話講座も最終回に近づいてくると、

「わが子と一緒に童話を読んでみたい。そのためには、基本を身につけるだけでなく、今後も研究をつづけていきたい」

「子どもの心を豊かにするためには、自分自身が豊かな人間にならなくてはならない……」

と、意欲はさらに高まってくるのです。

講座の全課程が修了すると、受講生のなかから、だれということもなく、「これでお別れしたくないね」というふんい気が流れはじめ、一人、二人……と集まり、自主運営による、ささやかな研究会が誕生しはじめていくのです。

◔生活を高めるために

「私たちは、童話を書くということに、自分たちの生きがいを見い出そうとしているのですが、書くということの意義って、どこにあるのでしょうか?」

ときおり、受講生から改まって、こんなむずかしい質問をぶつけられると、一瞬戸惑ってしまいます。

そんなとき、私はいつもきまって、次のような話をすることにしているのです。

「私は書くことが好きです。生活していくうえで、書かずにいられないことが、たくさんあるから書いているのです。ときおり雑誌などに、私の作品が発表されることがあります。すると、ある人はこういいます。『きみの作品よかったよ。いろいろ考えさせられた。でも、最後の場面のところだが、きみの考え方は、甘いんじゃあないかなあ』と。こんなことばを聞いたとき、私は書いてよかったなあ、と思います。そんなとき、私は自分自身の生活を、今一度みつめ直して、考えの甘さを反省します。また、ある人はこうもいいます。『本を出版したんだって……。もうかっただろう？　あまり生活を売りものにするなよ』と。妬みにもにた、こんなことばを耳にすると、なぜか悲しくなってくるのです。

私は、自分自身の体験したことがらや、できごと、体験のなかで感じたり、考えたことをひとまとまりの文章にまとめることによって、自分が今までなにげなく過ごしてきた生活のなかに、とても大事な意味や価値があることを発見でき、そこからさらに考えを深めることができるから書いているのです。作品の内容を指摘、批評されることによって、自分自身をさらに向上させることができるのです。つまり、なぜ書くかということを、ひとことで答えるとするならば、〈自分を成長させるため。生活を向上させるため〉というこ

とになるでしょう。」

ところで、ひとを感動させる作品を生み出すには、ふだんからものを見る目を育てていなければなりません。私たちの毎日の生活の流れは、一分一秒といえども、必ず、ある何かと対峙しているのです。それに対して、今、自分は何を感じとっているのか、ということをつねに追求することを忘れてはいけません。『そんなことなんにも感じていません』というのであれば、そのひとは〈クッチャネノバケモノ〉同然です。ちょっときびしいことばになってしまいましたが、要するに、『私たちは、生活のなかで成長していくのだ。そのためには生活を切り離して、ものを考えることはできないのだ。生活を深くみつめ、さまざまな問題について考えをまとめることが必要なのだ』ということを、つねに作品を書くうえでの、土台石としてほしいと思うのです。

私は、生活ということばをたびたび使いました。それをひとことでまとめるならば、「学習すること・仲間とのつながりを大切にすること・余暇を充実させることの三点を、意味ある正しいものに向上させていくこと」ではないかと考えているのです。

この三点を、あらゆる角度からみつめ、そこから題材を発見し、構想を練ることが作品執筆の第一歩なのだと思います。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

◓感性をみがこう

私は各講座の結びには、受講生にむかって、次のように激励します。

「みなさんは、ものを書いてみようと思ってこの講座に参加したのですから、どうか最後までペンを折らずにがんばってください。書いたものが、うまいとか、へただとか、そんなことを考えるのは二の次なのです。みなさんが意欲的に漕ぎ出した船です。どうかたくましく、大洋を乗り切ってください。ものを書くには、つぎにあげる四本の柱が、一本欠けただけでくずれてしまいます。どうか、四本柱をしっかりと支えていってください」

●第一の柱・感性をみがきましょう。

感性とは、刺激を受けて、何らかの感覚をひきおこす心のはたらきのことです。感受性を豊かにするともいいます。

あるものをみつめて、どのようなことを感じるか、それはひとさまざまです。ところが、ものを書くひとにとっては、対象をどう感じ、それをどのようなことばを駆使して形づくっていくか、ということが最もたいせつな要素となってくるのです。そのためには人一倍

多くの直接体験を積んだり、また読書・観劇などの間接体験をとおして、心をみがいておかなければなりません。

たとえば、岩壁に打ち砕けた波を見て、「美しい、白い波」と、どこにでもころがっていることばで叫ぶひとと、「わあ、まるで、真珠のネックレスをのばしたみたい」と、個性的な感覚で叫ぶひととでは、ものを書いたときに、大きな差が生じてしまうのです。

●第二の柱・気迫でぶつかりましょう。

書くということは苦しい作業です。書店で絵本を手にしたとき「こんなかわいい作品を書く作家は、きっと楽しみながら書いているのだろうなあ」と、思われることもあるでしょう。とんでもない。一編の作品が誕生するまでには、素材の発見→主題の決定→構成の工夫→草稿→推敲(すいこう)→清書という、苦しみの山をいくつも乗り越えてくるのです。

まして、今、子育てのまっ最中のおかあさん方にとっては、机に向かう時間さえあまりないのではないかと思います。しかし、一日二枚でも、三枚でもよいのです。「ペンを握ってみる」「書いてみる」という意気込みの灯だけは、けっして吹き消さないでください。ものを書くということは、気迫をもたなければ、挫折してしまいます。

「雨だれの努力」ということばがあります。一日二枚ずつ、二百日書いても、一年間に四百枚の原稿（幼年童話二十冊分）が、たまる勘定になります。

●第三の柱・人との出会いをたいせつに育てましょう。

〈書く〉ということは孤独な闘いであると同時に、仲間との葛藤でもあるのです。ものを書く→合評会で批評される→次作への意欲に燃える。仲間たちがいるからこそ、自分自身が磨かれ、進歩していくのです。

こうして、作品が完成したとき、出版の労をとってくれるのは、その会の指導者です。初心者に、煮え湯を飲ませるような、辛らつな批評を加えた指導の先生も、最終的には、その作品の面倒をみてくださいますし、仲間たちも出版を祝福してくれます。

どうか、ある研究会に所属したら、その研究会を通じて出会った人びととのふれあいを、たいせつに育ててもらいたいと思います。チャンスの芽というものは、身近なところにころがっているものなのです。

「わたしは、いつも合評会でケチばかりつけられるから、ちがう研究会に移ろう」と、転々とするひとに限って、どうも良い作品を生み出せないようです。

また、グループに所属しないで、「ひとりで童話を書くこと」に取り組む人も、作品ができたら一度は仲間に見せて、感想をのべてもらったり、批評してもらうことがだいじなことです。

●第四の柱・書くための技術を身につけましょう。

ものを書くのに、書くための技術だけが先行してはいけません。それよりも、「何を書かなければいけないのか」「どうして書かなければならないか」という、姿勢が表面に打ち出されてこなければなりません。

しかし、それを「どう書くか」というために、最低の技術は身につけておかなければなりません。たとえば、童話を書くのであれば、「童話の素材発見の目」「構想のねりかた」「書き出しの工夫」「描写のしかた」から、「原稿用紙の使いかた」まで、その基本だけは理解しておきたいものです。書くための技術だけは、ペンを握っているうちに、自然と自分の身に備わってくるものですから心配いりません。

わたしは、月に一回は、どこかしらの研究会に招かれて、多くの方々と一緒に童話の勉

強をしています。

受講生は、自分たちの書いた作品を、人数分コピーしてきて配り、目を輝かせて説明します。

「このあいだ川が決壊して、農家の人びとがこまったでしょう。そのことにヒントを得て、動物村が洪水になったお話を書いてみました」

「去年、A島が噴火して島民が全員逃げ出したでしょう。そこで、馬を主人公にして、人間のいない、さびしい気持ちを描いてみたんです」

受講生たちは、身近な社会問題のなかから、さまざまな素材を発見してきては、それを自分のことばで、原稿用紙にぶつけているのです。

童話そのものは、まだまだ未熟で、作品としては、未完成なものばかりです。しかし、「書かずにはいられないことを、童話の形式で書く」という意欲はすばらしいと思い、私は、いつもその思いを高く評価しているのです。

書く→考える→発表する→話し合う→問題が深まる、という作業を通して、受講生の心は日ごとに豊かになっているのです。そして、そうした作業を繰り返していくうちに、文章も上達し、やがて一人、二人……と「童話の本」が出版され、日本じゅうの子どもたち

の目にふれていくようになるのです。
みなさんペンを握ってみませんか。
みなさん童話を書いてみませんか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com